

生物生産学部

理想社会に向けて

生きる道の模索を

生物生産学部長 三國 英實



新入生の皆さんの入学をお祝いし、心から歓迎する。

皆さんはいま、広島大学へ入学した感激をかみしめ、専門的技術・知識を身につけるとともに、サークル活動・ボランティア活動への参加などを通して豊かな学生生活を送ることを願っていることと思う。初心を大切に、大いに頑張ってください。

生物生産学部では、私たちも生態系の一員であることの認識に立って、環境保全を図りつつ生物の生産性を高め、

生物資源の有効利用を実現し、食糧生産をはじめ人類の持続的生存と福祉の向上を理念として、教育と研究を進めている。昨年十一月にローマで国連食糧農業機構(FAO)主催で開かれた

「世界食糧サミット」は、「すべての人々が十分な食糧と、飢餓から解放される基本的権利を有すること」「二〇一五年までに栄養不足人口を現在の半分の水準に削減する」ことを宣言している。私たちも、こうした地球規模の課題に積極的に取り込んでいくことが求められている。

オリキャンに行こう



教授を先頭に入村



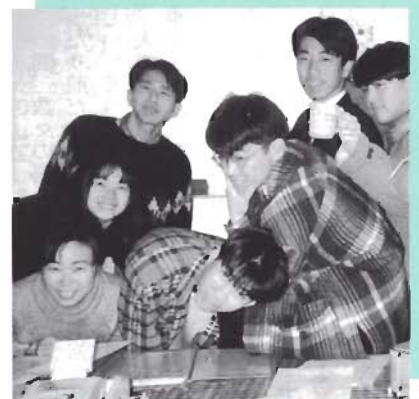
いざ! ファイヤーストームへ

二十一世紀の理想社会に向けて、新入生の皆さんが学生・留学生・教職員との交流を通じて、自らの生きる道を模索し、豊かな人間性を研ぐために、悔いのない学生生活を送ることを望むものである。(みくに・ひでみ)

まだ顔も知らない皆さんへ

生物生産学部 矢野 淳子

私が大学生になったばかりの頃、一体どんな言葉をかけてほしかっただろう。だが、若さゆえの傲慢さのため、人の忠告を受け入れる素直さは持っていなかったと思う。当時の私は、束縛から逃れ、自由になれたことを心の底からうれしく思った。将来の確固たる目標はまだなかったが、ただ漠然と、一生物学問を続けられる環境にいたい、世界を股にかけて仕事をしたい、と考えていた。そのためには、まず精神的に強くならねばならないし、世界に出て恥ずかしくない日本人でなければいけない。そこで、茶道を習い、武道を始めた。これが間違いのもので、本業である学問そっちのけで没頭してしまった。後悔という言葉は好きでないけれど、このことに関しては少し後悔している。



研究室で学生とともに(筆者左端)

こんなふうには、学生時代は政治経済に全く興味なかったし、新聞をにぎわす日々の出来事に理不尽さを感じることはあるものの、それらがいかに自分の生活に影響を及ぼし得るかさえ考えていなかった。ところが、いざ仕事に就こうという段になると、自分が社会という制度の中から抜け出し得ないことを痛感した。経済状態に左右され、学歴、性別による差別も受ける。何だか暗い気持ちになった。

アメリカで会ったインド人の研究者に、日本にはなんの資源もないから先行きが心配だといったら、お前らには頭があるじゃないか、と返されたことがある。一番大切なのは教育の質だと納得した。私たちはそれを提供する立場にあり、皆さんはそれを選び、受け取る側にある。双方の真剣さが必要だと思う。(やの・じゅんこ)